研究最前線

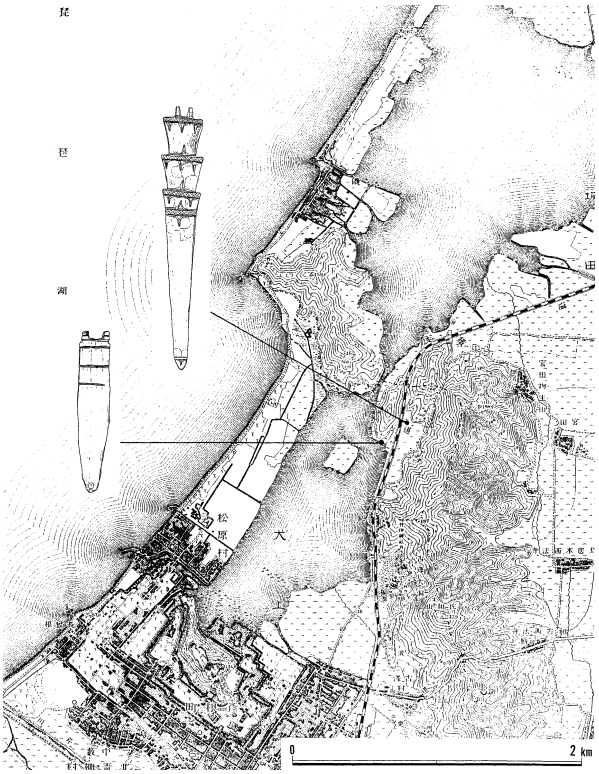
滋賀県指定有形文化財に指定された 松原内湖遺跡出土篦状木製品と松原内湖の意義

琵琶湖博物館　専門学芸員　用田政晴

はじめに

琵琶湖博物館が所蔵する彦根市松原内湖遺跡から出土の篦状木製品が、平成15年（2003）4月3日に滋賀県指定有形文化財（美術工芸品）考古資料の部として指定されました。

松原内湖遺跡は、彦根城の北に位置した旧松原内湖の北東縁辺部にあり、縄文時代から江戸時代にまで至る複合遺跡として知られています。現地では、昭和59年（1984）から平成3年（1991）にかけて発掘調査が行われ、その資料は、現在、琵琶湖博物館に収蔵されています。また、弥生時代を中心とする木製農耕具や漁具などは、琵琶湖博物館2階の「人と琵琶湖の歴史」展示室で、常設展示しています。



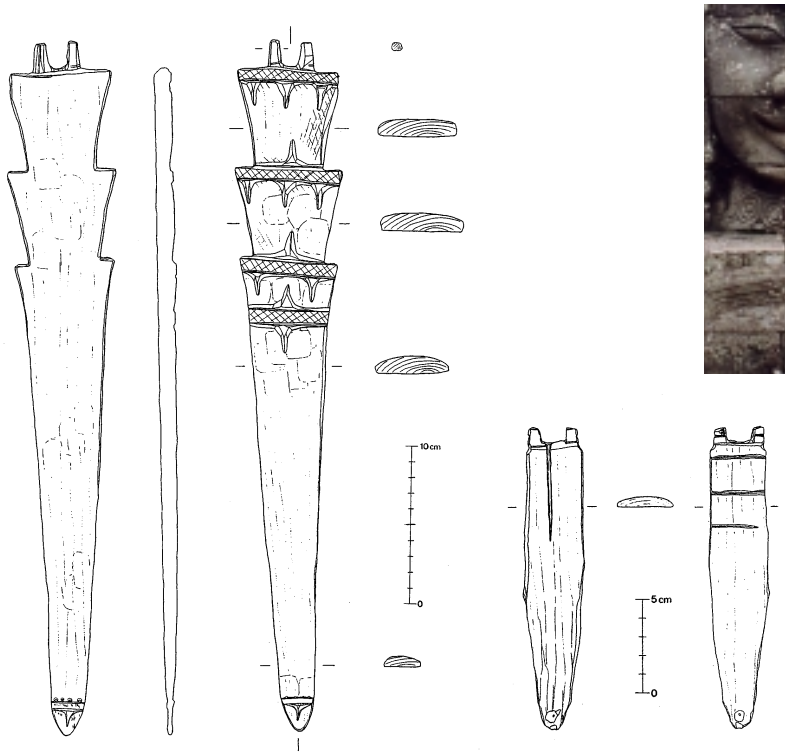
旧松原内湖と篦状木製品出土地点（明治28年）

篦状木製品

篦状木製品は、戦後の考古学の概説書として最も著名な小林行雄の『日本考古学概説』にも、縄文時代晩期の遺物として青森県中居遺跡の資料が図入りで紹介されていましたが、確実な用途は明らかではありませんでした。

今回、指定された資料は、かつての松原内湖の湖岸に堆積した縄文時代後期後半の元住吉山Ⅰ式ないし一乗寺K式と呼ばれる土器を中心とする遺物包含層から出土したものです。しかし、その施された格子文、山形文、三叉文という文様は、縄文時代晩期前半（およそ3000年以上前か）の滋賀里Ⅱ式の土器など（次ページの図参照）によく見ら

篦状木製品



篦状木製品実測図

れるものであることから、このころの琴のような楽器か機織の道具の一つと考えられています。

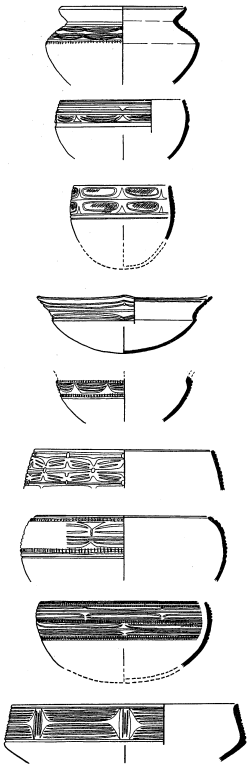
大きい方（第1号）は、剣身を三段重ねしたような形で、長さ43・7cmを測ります。頭部には2本の突起とともに彫刻がほどこされ、山形文の一部には水銀朱による赤い着色も認められます。表面はていねいに磨かれており、裏面は無文で、先端には4つの小さな穴があけられています。

小さい方（第2号）の長さは16・6cmで、長いものを作り替えた可能性があります。2本の角状突起を備え、表面には線刻がほどこされており、先端には焼け火箸であけられた小さな穴があります。裏側は無文です。

箆状木製品の用途

発見当初、アイヌに伝わる「トンコリ」と呼ばれるものに近い楽器かと考えられ、文様帯と音階が一致すると言われていました。しかし、弦や琴柱を取り付けた跡がないことから、これもアイヌなどに伝わる機織の道具の一つで、「アッシ（ニレ科の樹皮繊維織物）」などを織る際、緯糸を入れるために開口したり、糸を通した後に打ちつけて整える「箆」の可能性もあります。このような類似例は、南米インカ文化などでも知られています。

いずれにしてもこの木製品は、装飾豊かで、赤く着色されるなど精巧なものであることから、特殊な使い方をしたのかもしれません。箆状木製品は、西日本の縄文時代にはほとんど類例がなく、また東日本でもこれほど精巧なものはほとんど知られていないため、貴重な資料といえます。



滋賀里式土器の文様

黒漆塗りの衣蓋

松原内湖遺跡の意義

旧松原内湖およびそれにつながる旧入江内湖は、原始・古代においては地勢的に東日本と西日本の結節点の一部にあたり、東西文物が相当量交流している珍しい場所です。またそこが、内湖縁辺部の腐食泥質の湿地帯という有機物の保存に極めて良い環境であったために、今日までそのことを我々に教えてくれたともいえます。

松原内湖遺跡では、箆状木製品の他にも縄文時代後期から晩期にかけての20隻近くの丸木舟、漆器椀、竪櫛、黒漆と赤漆で装飾した弓、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての小銅鐸、黒漆塗りの木製短甲や衣蓋、奈良時代の巻胎漆器が発見され、最近では旧彦根藩による幕末の火薬庫跡まで発掘調査されています。

特に、縄文時代の竪櫛は、これまで北海道から東北・関東を中心に多く見られていたものであり、木製短甲の発見例も全国では10例ほどです。また、黒漆塗りの衣蓋や巻胎漆器は、共に正倉院御物にも類例が知られるなど、一般の集落跡ではほとんど発見されない遺物です。古代において、松原内湖周辺地域は、単に交通の要衝というだけではなく、極めて公的なあるいは政治的に意味のある機関、場所であったことを伺わせます。

木製短甲出土状況

衣蓋（左）と短甲（右）の使用法
（『レトロ・レトロの展覧会』滋賀県文化財保護協会1988年より）

このことは、松原内湖に隣接する米原が、遅くとも近世においては背後の旧入江内湖に5つもの船溜まりを備えた琵琶湖でも主要な港町であり、北国街道の宿場町でもあったことと、新しくは国鉄時代、名古屋鉄道管理局、大阪鉄道管理局および金沢鉄道管理局の管理が交差する鉄道の町であったことなど、道路、船、鉄道の拠点であったことと無関係ではなさそうです。

【参考文献】

●小林行雄1951『日本考古学概説』東京創元社
●細川修平1982「滋賀県松原内湖遺跡出土の箆状木製品」『考古学雑誌』72-4 日本考古学会
●山口庄司1988「松原内湖出土の琴箏の復元　その2」『滋賀文化財だより』129　財団法人滋賀県文化財保護協会
●吉田秀則ほか1992『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ－木製品－』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
●松沢　修1996「箆状木製品の用途について」『紀要』9　財団法人滋賀県文化財保護協会
●用田政晴1999『信長　船づくりの誤算－湖上交通史の再検討－』サンライズ出版
●佐々木利和ほか2002『自然と共存したアイヌの人々』青森市歴史民俗展示館稽古館
●出利葉浩司ほか2002『海を渡ったアイヌの工芸－英国人医師マンローのコレクションから－』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
●用田政晴2002「湖上交通史における佐和山城の史的意義」『城と湖と近江』サンライズ出版
●用田政晴2003「松原内湖の火薬庫」『湖国と文化』103　滋賀県文化振興事業団